

## 法話概略【後悔を持ったまま次に臨むこと】

新年となりました。まずもって、穏やかな新年最初の朝礼を迎えられました事に感謝です。こうやって顔を合わせられた事、お互いに尊びあいましょう。おかげさまで。

さて、『まんさく正月号』でも触れた内容ではありますが、サッカー元日本代表・中村俊輔さんの引退企画の番組を拝見いたしましたら、『あの日、あの1試合に戻れるとしたら…』という質問に対して、とても興味深いお話をされていました。その1試合に中村氏があげたのが以下の試合。

2試合残して、後1試合でも勝てれば優勝というところで、まさかの2連敗。中村氏は、『試合に負けた事よりも、最初の1試合目に負けて、残る最終戦までの1週間のどんよりした暗いチームの雰囲気重くて…。キャプテンとしてあの空気を変えられないまま最終戦を迎えてしまっ。あの悔しさが忘れられないですかね。でも、負けてしまうと、「何かしらできたのかな」という経験はできたので、トータルで言えば力が無かったということで、それを経験して次に生かせる材料にはなりました。ミスしたらその日で切り替えはできない。逆にそのまま持ったまま次の日の練習をします。切り替えたら消えちゃう気がするんで。切り替えていこうってよくなりますけど、僕は“悔しさ”を消さないままいきますね。その繰り返しですかね。繰り返して、それでまた、もっと上手になりたいって気持ちがどんどん大きくなっていくんですよ。』

このような内容でした。私たちの仕事や生きている場所とは全く違う世界の話ではありますが、けれども、通じるものがあるなぁと思いながら観ていました。

これまで見送ってきたお年寄りたちの偲びのしゃべり場などやっても実感する事ですが、“もっとやってあげたかった事”、“やってあげられなかった悔しさ”などが言葉として出てきます。急な別れでは、特にそんな思い、後悔の念が出てきます。

それでも、これまでの苑生活の中で、やってあげられた事はたとえ小さい事でも沢山ある訳で。

今も、看取り期の方々も含め、今、自分たちがやれる事がある。それが何なのかを相談し、口の渇き一つでも潤してあげたいと思って、手間をかけてくれている場面があります。この少しのひと手間が積み重なっていく。看取った方にできなかった関わりを、今、関わる目の前の方に…。以前、光寿苑で看取らせて頂いたお年寄りの姪さんが、遠方から駆けつけて、こう仰っていた事を思い出しました。

「私、(叔母の)最後の顔を観て、本当にキレイで感激しました。お清めの技術が高い事ももちろんですが、それだけではあそこまでキレイにならない事、私、看護師なので知っています。以前2度ほど面会に行った時も本当にキレイにして下さっていて、叔母は幸せ者だなあって思っていました。職員さんたちの日々の心のこもったケアのおかげです。本当にありがとうございました。」

たとえ少しのひと手間であっても、一人ひとりひと手間がそういったものを生み出していく。

今日1日も含めまして、今年もよろしくお願ひします。

## その他連絡事項

- ① 業務上の公用車運転に関わるアルコール検知器の使用を、準備出来次第、開始致します。
- ② コロナワクチン接種が1月13日予定されています。職員でもまだ未接種の人はお声掛け下さい。
- ③ 「コロナウイルス集団感染闘いの日々『振り返り』」を、ポスト職中心に出してもらいまとめました。こちらを通して、今後の具体的感染症対策を深めていきたいと思ひます。

【講話、③ = 光寿合理事長 ① = 総括課長 ② = 看護師】